

# 寄稿 プーチンロシアの対中政策と対日政策



月出 皎司 (ひたち こうじ)  
東京財団ロシア語オピニオン・サイト  
編集長

最近のロシア外交の動きを見ると、アジアに本格的な関心を向けてきたという印象を強く受ける。これは、対米関係、対EU関係に停滞感があることと対照的である。

もちろん、経済の分野では、西との関係が現状ではアジアとの関係よりもずっと大きいし、政治分野でもEUとの関係をひどく損なったという状況ではない。しかし、ロシア外交が全体として、発生する事態に対応を迫られるという意味で、受け身の姿勢を強いられている中で、アジア地域に戦略的な視線が向けられている点が注目される。

## 1. ロシア外交戦略の概観

現在のロシア外交は、エリツィン時代にロシアが経験した対外関係に対する自己否定的な評価を背景にして理解する必要がある。エリツィン時代には、ロシアと欧米諸国の関係は、少なくとも見かけ上は、かつてなく温かいものであった。しかし、ロシア国内には、このような関係が、実際にはロシアという国の弱体化を狙う陰謀であるという（行き過ぎた）猜疑心と不満が蓄積していった。プーチン政権が掲げた「強いロシア」復活の目標は、エリツィン外交の否定を含んでいた。欧米が旧東欧およびバルト諸国のNATOおよびEUへの取り込みを性急に行ったことで、それにいっそう拍車がかけられた。

対米関係について見れば、2001年9月のテロ事件をきっかけにして接近が図られたが、その1年後には、早くも対米警戒の姿勢に戻っていた。その根底には、米国の力の優勢を認めつつも、パワーゲームにおいて、可能な限り対等なプレイヤーの地位を保ちたいという強い衝動がある。ロシアの対アジア外交にも、対米関係についてのこのような基本姿勢が反映している。

欧州との関係は対米関係と基本的に異なる要素をもっている。ロ

シアから見た欧州の歴史的、文化的な親近感以外の地域に比べて圧倒的に強い。また、大陸欧州は米国の圧倒的な影響力から一定の距離を置くという戦略的な方向性を持っている点で、ロシアと共通の価値観を見いだす素地がある、とロシアは考えている。長期的に見てロシアと欧州との関係が大きく崩れることは考えられない。

旧ソ連諸国との関係では、中央アジア諸国との関係で主導権を取り続け、米国のこの地域への勢力扶植を妨げることがロシアにとって最大の戦略目標となっている。また、ウクライナを「手放す」決意をすることは、きわめて困難であり、それゆえにロシア外交にとって頭痛の種であり続ける。

中東、南西アジア、中南米、アフリカ諸国の中では、ロシアの前向きな外交対象となっているのは、インドのみである。その他の諸国については、ソ連時代の権益の残りを再利用する姿勢が一部に見られるものの、創造的な関係構築にまでは手が回らない。イラン、シリアなど、経済面でも一定の重要性をもっている国々もあるが、米国の世界戦略の影響を受けやすいため、ロシアが主体的に構図を描くことは難しい。

## 2. 対アジア関係

ここ数年、主として成長アジア諸国との関係拡大に注意が向いてきている。これら諸国の巨大な成長ポテンシャルをロシアもようやく認識したという感じである。なかでも現ロシア政権が重視しているのは中国とインドである。ASEANとの関係にも力を入れはじめたが、今の段階では、対米戦略の文脈が中心であり、国際問題協議のためのフォーラムとしての意義を認めている程度である。ここでは紙数の関係で、対中関係を中心に述べる。

### (1) 対中関係の基本点

ロシアの国際戦略家たちのほぼ共通した認識において、中国は、文明論的に見るとロシアのオポネントである。しかし、中国は米国、欧州、ロシアとともにすでに世界の「パワーセンター」になっており、近い将来における(準)超大国化は不可避とする見方が優勢になっている。

ロシアの判断では、ロ中間には国際政治の分野において次のような一致点が存在する。

- 戦略的な対米対抗意識。
- 分離主義反対。これは人権問題、民主化問題に関しての、欧州および米国とロシアの間の摩擦と対極的な関係にある。
- 中央アジアでの利害（潜在的な不一致が予想されるが）。これは主としてこの地域に関する米ロ間の摩擦の反映である。

### (2) 軍事協力

対中軍事協力は、兵器輸出による軍事産業の維持、兵器開発費の確保という直接的な利益とともに、閉塞感のあるロシア軍幹部にある種の充実感を与える効果ももたらす。超大国化に不可欠な軍事力の近代化において、事実上ロシアに依存する以外の選択肢をもたない中国に引きずられている感じも否めないが、基本的には上述した戦略的考察に沿った路線とみることができ。

### (3) エネルギー協力

従来西欧向けの輸出が主だったエネルギー戦略の方向を東にも向ける方針は、未開発のエネルギー資源、とくに天然ガス資源が東シベリアと極東に集中していることと、エネルギー開発を通じて、過疎化の危機にさらされている東部の経済的再生を果たそうとする狙いと裏付けられている。地理的な条件と経済規模および成

長性の点から見て、最優先の市場は中国にならざるをえない。また、インドとの関係強化に関しても、ロシアは、従来からの兵器協力にエネルギー協力を加えようと努力している。

#### (4) 対中関係強化に関するロシアの国論

中ロ関係の緊密化が印象的な早さで進んでいることに関して、ロシア国内ではさまざまな議論がある。当然慎重論や、中国脅威論もある。その中で、重要と考えられる戦略的な論点を拾ってみる。

①中国の潜在的なパワーはあまりにも大きいという現実主義的な主張がある。ロシアは米国と組んで中国に対抗したり、中国カードを振り回したりする余裕はない。この立場からすると、ロシアは、今後長期間にわたって、中国の領土拡張野心を束縛・緩和する政策を採り続けていかなければならない。

②ロシアが領土の不可侵と主権の保証を得られるのは中国からだけであるが、ロシアと中国の戦略的な結びつきは、やがてロシアの中国への従属、権威の失墜という結果をもたらすだろう、とする見解もある。ロシアは中国のもとで、米国中心の今日の世界で欧州あるいは日本が保持しているのとはほぼ同様の地位に落ち込むと指摘する。前項と同様なリアリズムであるが、そこから出てくる結果と現在ロシアが求めている「偉大なロシア」のイメージの間に生ずるギャップを指摘する点に特徴がある。

③中国の潜在的な脅威を重視する論調は、リベラルな知識人を中心として非常に盛んである。この議論は、ロシアと中国の文化的、文明的な違いを踏まえた上、ロシア帝国の版図拡張の歴史に対するある種のひけめにも裏付けられている点で、説得力がある。弱点は、中国「封じ込め戦略」のような国際協力関係

の展望がどこにも見いだせない点にある。

### 3. 対日関係

対日関係は、あきらかに中国重視姿勢のあおりを受けている。冷戦終了後、ロシアの日本に対する関心は、経済協力への期待が主であった。その後オイルマネーの流入で、外国からの資金に頼る必要性は激減した。極東経済浮揚と日本の経済協力とを結びつける考え方はまだ一部に残ってはいるものの、決して有力ではない。太平洋パイプライン計画にしても、ロシア独自の思惑に沿って進められているのであって、日本に対する評価の上昇を意味しない。トヨタ自動車の進出にしても、画期的な出来事なのは日本の業界にとってのことであって、製造業の再編・近代化に今もって本気で取り組む姿勢がないプーチン政権にとっては、多数ある対口進出案件の一つにすぎない。日本産業との協力がロシア産業の復興にもたらしうる真の価値には気づく気配もないのが現実である。

外交ゲームの分野でも、ロシアの日本に対する関心は不当に低くなっている。日本がより独立したパワーゲームの参加者になるものと想定して、ある種のパートナーシップの構想を描いた時期もあったが、その後、日本を見限ったように思われる。現実には、日本は米国の対中軍事戦略と一体化して、あらたな国際環境の中で積極的な軍事貢献を行う態勢を決めている（米軍再編に関する2+2協議やミサイル防衛での日米協力）のだが、クレムリンは、いまだに日本を過去の冷戦時代同様の対米追従国としか見ていないように思われる。

経済と外交の両面におけるこのような理解不足が、クレムリンが対日外交の優先度を大きく下げる結果になっているのが現実なのである。